

性別による区別は必要なのか

柏市立酒井根中学校 三年 鈴木 毬友

赤や青等、絵の具の色はそれぞれが全く別の色として存在する。だが、混ぜると赤と青だけでない、紫や黒等の無限の色が生まれるのだ。私は、人の性もこれと似ているのではないかと考える。男か女かという簡単な区別ではなく、いろいろな色が混ざり合うグラデーションこそが、本当の性の形であるのではないか。小さい頃は性別なんて気にせず、好きな服を着て、好きな遊びをしていた。だが、大きくなるにつれ「男の子はあっち、女の子はこっち」等と分けられる機会が増えていった。そのたびに、「どうしてなんだろう？」と素直に疑問に思っていた。きっとそれが、社会が性別で人を分けているということに初めて気付いた瞬間だったのだと思う。体育祭で男女別の競技があったり、係決めで「女の子はこれ、男の子はあれ」と決まったりするたびに、何故だか凄くモヤモヤした気持ちが大きくなっていった。

小学校高学年になると、スカートよりもズボンを選んではくことが増えていった。一人称も『私』から『僕』、『俺』に変わった。その時々で、自分にしっくりくる言葉を探していたんだと思う。自分の行動を「女の子だから」と制限されるたびに、胸の中に違和感やモヤモヤがさらに大きくなって、溜まっていったのだ。周りから「女の子なのにかっこいいね」と言われた時は、不思議と嬉しかった。だが同時に、性別で区別されることにモヤモヤした気持ちを抱えていた。嫌だと感じているのに対し、周りからのその言葉に喜ぶ自分がいることに正直戸惑っていた。私は、家族の中ではずっと「可愛い」と言われ続けていた。それは私が「女の子だから」。クールな服を着たって、ほとんど「かっこいい」とは言われなかった。そんな中、唯一おじいちゃんだけは私に「かっこいいね」と言ってくれたのだ。大人たちが「女の子らしく」を求めるなかで、おじいちゃんは今私をひとりの人間として見てくれていた気がして嬉しかった。性別ではなく、本当の『私自身』を。

私は、女性として生まれたことを嫌だとは思っていない。ただ、「女の子だから」「男の子だから」と決めつけられる社会の考え方には疑問を感じている。

あくまで性別は体の一部であって、心や人生を決めるものではないと思うからだ。

中学生になり、ネットや本で性の多様性を知るうちに、長く感じていた違和感が少しずつほどけていった。「性別は二つだけではない」「自分の感じ方は間違っていない」と知り、大きな安心と自信を得た。最近では、体の見た目を自分らしくするため胸を潰し、普段は『俺』と名乗っている。それが今の自分にとって一番自然な表現だから。まだ自分の色を全て出せているわけではないが、今の形が一番自分らしいと感じている。

社会には、私のように性別の枠に違和感を持つ人や、多様な性のあり方を選ぶ人が沢山いる。だが、日本にはまだ男女の差や性別による役割意識が根強く残っている。

だからこそ、性別に縛られず自由に生きられる社会が、早く実現されてほしいと思う。誰もが性の多様性を表現し、違いを認め合い尊重できる社会。自分の色を堂々と輝かせられる世界。そんな社会になれば、もっと多くの人が自分らしく生きられるはずだ。私はこれからも、誰もが安心して自分の色に誇りを持てる社会を願い続けていく。

×ジェンダー、クエスチョニング。そしてセクシュアル・フルイディティ。世界にはまだこのような言葉を知らない人も多いだろう。だから、この作文を通して伝えたいのだ。私のように、影で自分の性について悩んでいる人もいるということ。そして、貴方だけの色、『自分色』を見つける大切さについて。